

イップスを克服できなかったスポーツ選手の 心理的過程

—野球競技を対象にした事例研究—

スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻

学籍番号 222M02

氏名 池田 和司

指導教員 土屋 裕睦 教授

論文等内容の要旨

題 目 イップスを克服できなかったスポーツ選手の心理的過程
—野球競技を対象にした事例研究—

学籍番号 222M02

氏 名 池田 和司

指導教員 土屋 裕睦 教授

本研究は、イップスを克服できなかったスポーツ選手が競技離脱を選択するまでの心理的過程を明らかにすることを目的とした。

本研究における調査は、現役時代に野球の投球および送球動作においてイップス状態に陥った経験を有し、かつそれを克服できなかったと認識している4名を対象に、アスリート・ライフラインを用いた半構造化インタビューを実施した。分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた。

M-GTAによる分析の結果、20の概念、8つのカテゴリー、3つのコア・カテゴリーが生成された。具体的には、イップスを克服できなかったスポーツ選手は、《Ca. 1 イップス状態に陥ったことを自覚する》ことで《Ca. 2 今の状態に混乱する》、《Ca. 3 現実から目を背けたくなる》といった否定的な心理的变化を経験する。しかし、《Ca. 4 克服しようという気持ちが現れる》ことで試行錯誤するものの、その過程においては、周囲からの献身的なサポートを得ることができず、心理的葛藤や悩みを独りで抱え込むといった《Ca. 5 自分の居場所を喪失する》事態に陥る。また、自身のアイデンティティである競技を失う不安から《Ca. 6 思うように報われない》という経験を何度も繰り返す。そして最終的には《Ca. 7 競技への熱が冷める》ようになり《Ca. 8 競技の継続を諦める》といった心理的過程を経ていることが明らかになった。

以上の結果を踏まえると、イップスに陥ったスポーツ選手は、(1) 周囲との相互性の希薄、(2) 競技の固執を背景にした報われない経験の繰り返し、といったバーンアウトに酷似したプロセスを経て、競技離脱を選択する可能性が考えられる。

英文タイトル The psychological process of athletes who retired due to the yips
-Case study on baseball-

英文氏名 Kazushi Ikeda

The psychological process of athletes who retired due to the yips
-Case study on baseball-

Kazushi Ikeda

【Abstract】

This study was to clarify the psychological processes that ultimately influence athletes with the yips to withdraw from competition. Using semi-structured interviews based on the Athlete Lifeline approach, four baseball players who experienced the yips in pitching and throwing during their careers and perceived an inability to overcome it were examined. Through M-GTA, 20 concepts, 8 categories, and 3 core categories were identified. These results indicated that athletes encountering the yips undergo negative psychological changes, including “awareness of being in a yips state”, “confusion about their current situation”, and a “desire to escape reality”. They attempt to overcome the situation through “desire to overcome appears”. However, efforts to overcome the yips often lack adequate support from those around them, leading athletes to internalize psychological conflicts and “lose their place in the world”. This situation is compounded by repeatedly “not obtaining expected rewards”, heightening anxiety about losing their identity as competitors. This psychological trajectory ultimately led to “losing passion for competition” and “stop competing.” These results suggest that athletes with the yips might leave their sport through a process that closely resembles burnout process due to a lack of supportive relationships and continuous unrewarding experiences underpinned by an obsession with the sport.

.

.

目次

第1章 緒言	1
第1節 イップスとは	
第2節 野球におけるイップス	
第3節 先行研究の概観	
第1項 イップスに至る要因の検討	
第2項 イップス経験における心理的特徴の検討	
第3項 イップスの対処法の検討	
第4項 イップスによる競技離脱の可能性	
第2章 目的	9
第3章 方法	10
第1節 質的研究法	
第2節 調査対象者	
第3節 調査手続き	
第4節 調査方法	
第1項 アスリート・ライフライン	
第2項 半構造化インタビュー	
第5節 倫理的配慮	
第6節 分析方法	
第1項 修正版グランデッド・セオリー・アプローチ	

第2項	分析手続き	
第3項	データ分析における妥当性および信頼性の担保	
第4項	研究する人間	
第4章	結果.....	19
第1節	できていたことができなくなる現実に直面している状態	
第2節	イップスを克服しようともがいている状態	
第3節	克服できないと確信している状態	
第4節	ストーリーライン	
第5章	考察.....	27
第1節	パフォーマンスの低下による否定的な心理的变化	
第2節	なぜ競技離脱を選択するのか	
第1項	周囲との相互性の希薄	
第2項	報われない経験の繰り返し	
第6章	総括および本研究の限界.....	33
第1節	総括	
第2節	本研究の限界	
参考文献	36
図表・資料		
あとがき（謝辞も含む）		

第1章 緒言

第1節 イップスとは

アスリートは競技人生において、さまざまな困難に直面する(秋葉, 2021)。その中でイップス(Yips)という現象は、近年、スポーツ選手における実力発揮の妨げやアスリートの困難事象の一つとして、注目されている。

これまでイップスは、「ゴルフのパッティング動作において影響を与える心理-神経筋障害」(Smith et al., 2000)と定義されており、ゴルフ競技を対象に、多くの研究が実施されてきた。しかし、近年ではダーツ(Roberts et al., 2013)、アーチェリー(Clarke et al., 2020)、卓球(木村ほか, 2021)など、さまざま競技で、この現象が見られることが報告されるようになったため、「パフォーマンスを成功させるために求められる精密で細かい動きのスポーツに影響する心理-神経筋の動作障害」(Clarke et al., 2015)と定義が拡張された。さらに、2018年に改訂された広辞苑(新村, 2018)においても「これまでできていた運動動作が心理的原因でできなくなる障害。もとはゴルフでパットが急に乱れることを指したが、現在では他のスポーツにもいう」と掲載されるようになった。

スポーツにおけるイップスの実態調査は、今日まで数多く行われてきた。例えば、アメリカのプロゴルファー2630人に対して行われた調査では、有効回答1031人のうち、52%が過去にイップスを経験したことがあると報告されている(Smith et al., 2000)。また、日本のプロゴルファー1356人に対して行われた調査では、有効回答1271人のうち、35%が過去にイップスを経験したことがあると報告されている(Revankar et al., 2021)。他にも大学女子ソフトボール部員325人に対して行われた調査では、有効回答287人のうち、

6%が現在もイップス状態に陥っていると報告されており（稲田・田中，2019），大学弓道部員 70 人に対して行われた調査では，有効回答 65 人のうち，63%が過去にイップスを経験したことがあると報告されている（西尾ほか，2021）。

第 2 節 野球におけるイップス

我が国においては，野球競技を対象にしたイップスの研究が多く存在する（柄木田ほか，2022）。例えば，首都大学野球連盟 1 部リーグに所属する大学硬式野球部員 107 人に対して行われた調査では，有効回答 104 人のうち，47%が過去にイップスを経験したことがあると報告されている（青山ほか，2021）。また，中学生野球部員 529 人に対して行われた調査では，有効回答 522 人のうち，42%が過去にイップスを経験したことがあり，さらに 10%は，現在もイップスの兆候が続いていると報告されている（賀川・深江，2013）。他にも，イップスを呈した高校野球選手の臨床事例（中込，2004；坂中，2022）や，現役プロ野球選手の自叙伝的書籍も存在している（飯島，2018）。

これらを踏まえると，野球競技におけるイップスは，トップアスリートのみならず，中学生や高校生といったジュニア年代を含めた多くの野球選手が，その現象に直面する可能性が推察される。それゆえ，野球競技におけるイップスの心理的支援を構築することは急務である，といえる。さらに我が国において，野球競技は幅広い年代にわたって非常に人気が高く，代表的なスポーツであることは周知の事実である。このことから，野球競技

においてイップスに関する知見を深めることが重要であるといえよう。以上を踏まえたく
えで、本研究では、野球競技におけるイップスに焦点を絞り、研究を進めていく。

第3節 先行研究の概観

第1項 イップスに至る要因の検討

今日まで、イップスに至るまでの要因を検討した研究が多くを占めている。Smith et al. (2000)は、イップスを発症しているゴルファーとイップスを発症していないゴルファーの2群間で、パッティング動作時の筋活動、グリップ把持力、心拍数を比較している。その結果、イップスを発症しているゴルファーは、左上腕二頭筋、左手上腕三頭筋、左手関節屈筋、左手関節伸筋の活動量が有意に高く、グリップ把持力および心拍数も有意に高いことが明らかにされている。Alder et al. (2011, 2018)の研究においても、イップスを発症しているゴルファーは、両手でのパッティング動作時に主動筋と拮抗筋の共収縮が起きていることが明らかにされている。また、ゴルフのパッティング動作時における両手首の変位量 (Alder et al., 2011)、両手首の速度のばらつき、右手首および右腕の平均加速度、右手首の角速度のばらつき (Alder et al., 2018) が大きいことも明らかにされている。Watanabe et al. (2021)は、イップス症状を有しているスポーツ選手とイップス症状を有していないスポーツ選手の2群間で、把持運動課題における感覚運動皮質活動を比較している。その結果、イップス症状を有しているスポーツ選手は、把持運動において力を強める際に α 帯の事象関連脱同期が有意に高いことを明らかにされている。これらの研究は一

貫して、イップスと特定の運動時に出現する動作性ジストニア（目崎，2011）との関連を主張したものである。

一方で、プレッシャーによりパフォーマンスが低下する Choking under pressure（以下「Choking」と略す）との関連性も報告されている（Smith et al., 2003）。Stiner et al. (2006)は、イップスの症状を有しているゴルファーを対象に、通常時のパッティング条件と金銭的報酬などを課した高プレッシャー条件の2条件でパッティング課題を実施し、条件下でのパフォーマンスおよび筋活動を比較している。その結果、高プレッシャー条件下におけるパッティングの正確性の有意な低下、動作時における筋活動の有意な増加が認められており、Chokingに関する先行研究（Cooke et al., 2010）と類似した結果を明らかにされている。また Bawden and Maynard (2001)は、イップスと Choking における心理的・行動的特徴と部分的に類似していると述べている。他にも、自身の動作を意識的に制御しようとする reinvestment（Bennet et al., 2016）、完璧主義（Clarke et al., 2020；Roberts et al., 2013）などの心理的特性が、イップスの発現に影響を及ぼしている可能性も示唆されている。

以上のように、先行研究では、イップスの発現機序に限局した研究が多くを占めている。しかし、イップスに至るまでの要因はいまだ不透明なままである（Philippen and Lobinger, 2012）。

第2項 イップス経験における心理的特徴の検討

イップスの発現機序に限局した研究が多くを占めている一方、イップスを経験したアスリートの心理的特徴を検討した研究も見受けられる。Bawden and Maynard (2001)は、イップスを経験した際の心理的特徴を明らかにするため、イップスを経験したクリケットボーラー8名に対してインタビュー調査を実施している。その結果、自身がイップスを経験した直後は、失敗への恐怖や競技への逃避願望といった否定的な感情が生じていることを明らかにしている。Philippen and Lobinger (2012)は、イップスを経験したゴルファーの思考や感情を明らかにするため、ゴルファー17名を対象にインタビュー調査を実施している。その結果、再び症状が起こりえるのではないかとという予期不安や自身に対する怒り、自信の喪失といった否定的な感情が生じていることを明らかにしている。

一方で、向 (2016) は、複数のイップス経験者の体験プロセスの類型化、およびイップス状態から抜け出そうと試行錯誤する過程を明らかにするため、現役時代にイップス状態に陥った経験を持つ野球選手7名に対してインタビュー調査を実施している。その結果、イップスを克服した野球選手は、暴投の原因を、技術的なものから精神的なものへと起因するようになり、暴投そのものをイップスとしてとらえなくなることで、イップスを克服するという仮説的知見を導き出している。さらに松田ほか (2018) は、イップス経験は、アスリートとしての心理的成長をもたらすのではないかとという関心から、イップスを経験したあとも競技継続している、もしくは競技継続意思のある野球選手6名に対してインタビュー調査を実施している。その結果、競技をする目的の具体化や動機の再認識といった「競技に対する意識の肯定的変化」、競技者としての長所や短所、能力に対する認識の見直

しといった「自己認知の変化」, 自身の状態の受容や気持ちの切り替えといった「精神的なゆとり」, 周囲からのサポートの再認識や他者へのサポート意識の高まりといった「他者に対する見方・考え方」, 競技への技術的および戦術的知識の高まりといった「競技に対する理解の深まり」といった5つのカテゴリーを生成している。これらを踏まえたうえで、「イップスを経験し、競技を継続している者もしくは継続意思を示している者は、イップスの対処過程における心理的葛藤やもがきに立ち向かいながら、スポーツ選手としての心理的成長を得ている可能性が示唆された」といった仮説的知見を導き出している。

以上のように、イップス状態に陥ったスポーツ選手の競技に対する心理的特徴、およびイップスを克服するまでの心理的過程などが質的なアプローチにより検討され、その内容が明らかにされている。

第3項 イップスの対処法の検討

これらの研究を踏まえたうえで、イップスの治療法やアセスメントツールなどの必要性が述べられており (Dhungana and Jankovic., 2013 ; 栗林ほか, 2019), 多くの研究が行われている。Bell and Thompson (2007)は、3年間イップス状態に陥っていたアマチュアゴルファーに対して、Solution-Focused Guided Imagery (以下「SFGI」と略す)を用いたトレーニングを5セッション実施した。その結果、ラウンド中における動作遂行時の震えや痙攣は改善され、イップスの対処法としてSFGIが有効である可能性を示した。その後も、SFGIの有効性における研究が蓄積されている (Bell et al., 2009, 2011)。また、Nakane et al. (2017)は、動作遂行時に右肩と右上腕の動作に異常が見られた高校野球選

手1名に対して、練習量の低減とともに **Muscle afferent block** (0.5%リドカイン注射) を3か月で5回投与した結果、投動作の大幅な改善が見られたと報告している。その他にも、認知行動療法を介入した症例報告や(伊豫, 2023) やイップスの対処法を書籍化(石原・内田, 2017) したものなども存在する。

以上のように、イップスへの治療法および対処法を開発するため、さまざまな研究や症例報告がなされている。しかし、これらの対処法は主として身体的なアプローチであり、イップスを経験したスポーツ選手に対する有効な心理支援の方策はいまだ見出されていない(土屋, 2018)。

第4項 イップスによる競技離脱の可能性

イップスの現象に注目が集まる理由の1つとして、イップスがスポーツ選手のキャリアを奪うリスクを孕んでいることが考えられる。Philippin and Lobinger (2012)は、イップスはスポーツ選手のパフォーマンスを遂行する上で致命的な問題となり、場合によってはスポーツ選手としてのキャリアを奪うことになりうる指摘している。Smith et al.(2000)においても同様に、イップスがアスリートを競技離脱に追い込む可能性を示唆しており、実際に、多くのプロスポーツ選手が、イップスによって競技離脱を余儀なくされている(例えば、スポニチ, 2024)。また向(2016)は、イップス状態から抜け出すまでの過程を検討する中で、調査対象者7名のうち、1名はイップスを克服できずに競技離脱を選択したことを明らかにしている。さらにイップスは、Chokingのような一時的な実力不発揮ではなく、日々の練習など慢性的に起こるものであり(Papineau, 2015)、たとえ不適応な状

態でありながらも部分的であるため、競技をそのまま継続せざるを得ない(秋葉, 2021).

つまり、イップス状態に陥ったスポーツ選手は、心身ともに不適応な状態であるにも関わらず競技継続を強いられ、イップスを克服できずに競技離脱を選択する可能性が推察される。そして、そのような選手はこれまでも一定数存在することが明らかになっている。

しかし、これまでの先行研究では、イップス状態に陥りながらも競技を継続している現役のスポーツ選手 (Bawden and Maynard, 2001 ; Philippen and Lobinger, 2012) や、イップスを克服したスポーツ選手を対象にしている(向, 2016)。また、松田ほか(2018)は、イップスの症状を改善またはほぼ改善し、競技継続をしているおよび競技継続意思のあるスポーツ選手を対象にした自身のサンプリングを研究の限界として挙げており、イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手を対象にする必要性を述べている。

これらを踏まえたうえで、本研究では、イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手を対象に研究を行う。そして、イップス状態に陥ってから、どのような心理的過程を経て、そしてなぜ競技離脱を選択するのかを検討していく。これは、イップス状態に陥っているスポーツ選手への心理的支援を、より充実させるための知見を蓄積することにつながる。

第2章 目的

本研究は、イップスを克服できなかったスポーツ選手が、競技離脱を選択するまでの心理的過程を明らかにすることを目的とした。

第3章 方法

第1節 質的研究法

本研究では、自然科学的な枠組みから演繹的に分析する量的研究方法ではなく、事例から帰納的に分析する質的研究法を採用した。今福（2021）は、質的研究を行う目的として「研究対象となる当事者の視点から見える事象や人々との関わり、その人の心情など内面的世界を理解すること」と述べている。また、鈴木（2016）は質的研究を行う際の適切な問題テーマの設定として、(1)自己の体験や観察の内省、(2)他人の体験や観察の聴取、(3)理論的研究からの演繹、(4)既存の研究の追試、改良、発展、を挙げられている。さらに、高木（2011）は質的研究について「特定の現象に関連したある概念が結果として揭示されるのである。しかも、質的研究では複数の概念間の関係をモデル化して、研究中の現象を記述し説明しようとする」と述べている。

これらを踏まえて、本研究では、(1)イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手の内的体験に迫り、それらを概念図として可視化することができる、(2)先行研究で導き出された結果や仮説を、より発展することが可能になり、さらなる知見の蓄積につながると思われる、という理由から、質的研究法を採用した。

第2節 調査対象者

調査対象者（以下「対象者」と略す）は、現役時代に野球の投球および送球動作においてイップス状態に陥った経験があり、かつそれを克服できずに競技離脱を選択した3名（対

象者 A, B, C) と, 研究の精密化のため同様の経歴をもった 1 名 (対象者 D) とした (表 1). 本研究では, イップス状態に陥ったスポーツ選手をより厳密に選定するため, 松田ほか (2018) および栗林ほか (2019) を参考に, (1)以前は簡単にできていた投・送球ができなくなってしまう, そのスキルの著しいコントロール欠如が認められた者, (2)投・送球におけるイップスが 1 か月以上継続した者, (3)イップス発現前は投・送球動作が容易にできていた者, という対象の基準を定めた. そして, 西條 (2007) の関心相関的サンプリングに依拠し, 選定した. これは「自分の関心 (リサーチクエスチョン) に照らして (相関的に) 対象者をサンプリングする」方法である. 本研究の関心は, スポーツ選手がイップス状態に陥ってから競技離脱を選択するまでの心理的過程にあるため, 競技レベルや競技年数は制限として設けなかった.

第 3 節 調査手続き

調査時期は, 20XX 年 6 月～11 月であった. 調査時間は, 一人あたり約 40～90 分であった. 調査形式は, 大学の演習室および外部施設の会議室にて, 1 対 1 の対面形式で実施した. また, インタビュー内容は対象者の許可を得たうえで録音した.

第4節 調査方法

第1項 アスリート・ライフライン

本研究では、対象者が過去の出来事を想起するツールとして、川島（2007）を参考に、「アスリート・ライフライン」と題したシートを用いた。このシートは、縦軸が実力発揮度、横軸が時間（時期）で構成されている。対象者には、「イップスになってから競技引退するまでを想起してください。次に、当時の実力発揮度を用紙にプロットしてください。最後にそれを線で結んでください」と教示し、インタビューの途中で十分な時間を設けたうえで記載を求めた。

第2項 半構造化インタビュー

データを収集するために、半構造化インタビューを実施した。これは、研究目的に沿った質問や方針を記したインタビューガイドを用いて行われ、その場の展開によって質問項目の追加や順序を変更し、より深く聞いていくインタビュー手法である（寺下，2011）。本研究においても、記載を求めたアスリート・ライフラインと、作成したインタビューガイドをもとに、柔軟性をもたせたインタビューを実施するように努めた。

インタビューガイドは、まず向（2016）および松田ほか（2018）を参考に暫定的なものを作成した。そして、現役時代にイップス状態に陥った経験を有する大学院生2名を対象に予備調査を実施し、作成したインタビューガイドは適切であるか、表現は平易であるかなどの確認を行った。それらをもとにインタビューガイドを修正し、以下のインタビューガイドを設定した。

- (1) プロフィール（野球歴など）
- (2) イップスについて（具体的な症状、イップス克服の有無など）
- (3) 送球時における感情（送球時にどのような気持ちだったのかなど）
- (4) 送球時における意識（どのような意識で送球を行っていたのかなど）
- (5) 競技への意識（どのような気持ちで競技を行っていたのかなど）
- (6) 周囲との関係性（指導者およびチームメイトとの関係性はどのようなものだったのかなど）.

第5節 倫理的配慮

本研究は、大阪体育大学倫理審査委員会の承認を受け実施した（承認番号 22-75）。調査開始前には、対象者に、本研究の概要と調査の主旨を口頭で説明した。そして、インタビューへの参加は任意であり、インタビューへの回答の拒否や途中辞退が可能であること、録音したデータおよび逐語化されたデータは厳重に保管すること、研究発表および論文執筆の際には、個人が特定されないように十分配慮することの説明を行った。そのような説明をしたのち、対象者の十分な理解を得たうえで同意書に署名してもらい、インタビューを実施した。

第 6 節 分析方法

第 1 項 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

本研究では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified-Grounded Theory Approach : 以下「M-GTA」と略す) を分析手法として用いた。M-GTA は「データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であり、理論の実践的活用」(木下, 2020) を目的とした分析方法である。また M-GTA を用いるのに適した研究として、研究対象とする現象がプロセス的側面を持っており、人間と人間が直接的にやりとりする社会相互作用に関与している研究であることが挙げられている (木下, 2003)。

これらを踏まえたうえで本研究では、(1)「できていた」ことが「できなくなる」イップスという現象を研究対象にするため、(2)競技において選手と指導者およびチームメイトとといった相互作用が必然であるため、加えて、(3)一連のプロセスを概念図として可視化することができるため、(4)現場への応用可能性を重きにおく分析方法であるため、という 4 点を理由に M-GTA を採用した。

第 2 項 分析手続き

M-GTA における詳細な分析手続きは、木下 (2020) および福井・豊田 (2015) を参考に下記に示す。

1) 逐語録の作成

録音した 3 人分 (対象者 A, B, C) の音声データを文字起こし、逐語録を作成した。

2) 分析テーマと分析焦点者の設定

M-GTA では、分析目的と分析方法のバランスを最適化するために分析テーマを設定し、分析を行ううえでの視点を明確にするために分析焦点者を設定する（木下，2020）。そこで本研究の目的を踏まえて、分析テーマを「イップス状態に陥ってから競技離脱を選択するまでのプロセス」、分析焦点者を「イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手」と設定した。

3) 分析ワークシートおよび概念の生成

本研究では、木下（2020）を参考に、概念名、概念の定義、具体例、理論的メモからなる分析ワークシートを用いた（表 2）。具体的な手順として、まず、データの量および内容が豊富であった対象者 A の逐語録を読み進め、設定した分析テーマと分析焦点者の視点から関連のある箇所を、着目順に具体例に記載した。その際、具体例を解釈するにあたっての分析者の疑問や思考などを理論的メモに記載した。そして、具体例と理論的メモを照らし合わせ、作成した分析ワークシートの内容を一文に凝縮したものを定義に、さらに凝縮したものを概念名に記載した。

次に、作成した概念をもとに対象者 B、C の分析を行った。具体的には、作成した概念に合致および類似すると判断した語りを、具体例に追加記入した。同時に、新たに概念を生成する場合は、対象者 A の語りを再度確認する作業を繰り返して実施した。なお、具体例が少なく、概念の生成が有効ではないと判断した概念は削除した。

4) カテゴリーおよびストーリーラインの作成

3名分の逐語データから概念を生成し、それらの意味ごとに関連がある概念をまとめたカテゴリーを生成した。そして、それらのつながりを可視化するために、概念図を作成し、それらを説明するストーリーラインを作成した。具体的な手順として、まず、生成されたカテゴリー間および概念間の関係を、暫定的に図式化した。その後、分析ワークシートに記載している理論的メモ、および具体例を参照したうえで、概念間の関係性を表すため、矢印を書き足し、概念図を確立させていった。その後、作成した概念図をもとに、分析結果を文章として確定させるため、ストーリーラインを作成した。なお、分析段階で、生成された概念およびカテゴリーを修正した場合は、その都度、調査対象者の語りを再読し、確認を行う作業を繰り返した。

5) 目的相関的飽和

目的相関的飽和とは、「適切な分析によって作られた構造（理論、仮説、モデル）が研究目的に照らして、それを達成できている状態」（西條，2007）のことである。本研究では、3名分のデータ分析を実施したあと、追加で1名（対象者D）にインタビュー調査を実施し、上記と同様の手順で分析した。そして、作成した概念の精密化を図り、目的相関的飽和が達成されるようにした。

第3項 データ分析における妥当性および信頼性の担保

本研究では、分析ワークシートの作成および概念図の作成の際にトライアングレーションを実施した。これは、異なった方法や研究者および理論的立場を考慮したうえでデータを解釈し検討する方法（フリック，2017）と位置付けられている。本研究においても、データの解釈において多角的な視点からの検討を行い、「分析の結果が恣意的な解釈に偏ることを防ぐ」（富永ほか，2015）という目的に基づいて実施した。具体的には、野球歴11年でスポーツ心理学を専攻している著者、運動部活動への所属歴があるものの野球歴はなく、スポーツ心理学を専攻している大学院生、運動部活動への所属歴がなく、主として社会学領域において博士号を取得し、過去に質的研究の経験を有している研究助手の計3名でトライアングレーションを実施した。また、イップス状態に陥ったスポーツ選手へのサポート経験があり、スポーツメンタルトレーニング上級指導士および公認心理師の資格を有している大学教授1名を加えて、作成した概念名やカテゴリー名の表現が適切かについて指導を得た。

第4項 研究する人間

M-GTAでは、「誰が何を目的にその研究を行うのかに関する倫理面と、データの意味の解釈をどのように行なうのかの分析方法論の面から研究者を位置づける」（木下，2020）ことから、分析する研究者の視点や背景および枠組みを明示する必要がある（富永ほか，2018）。そこで、本研究の著者における背景および枠組みを明示する。

著者は、小学2年生から高校3年生までの11年間、プレーヤーとして野球に取り組んできたが、中学2年生の時にボールが投げられないという状態に陥った。その後、高校に進学し野球を継続するものの、症状が改善されることはなく悪化していった。卒業後は出身校で野球を指導することが多々あったが、そこでも、自身の現役時代と同じ状態に陥り、競技離脱を余儀なくされた選手を目の当たりにしてきたという経験を持つ。

これらの背景を踏まえたうえで、自身の経験と指導した経験、および研究者としての距離を一定に置き、詳細で緻密に分析した。また自身の属する研究室の指導教員およびスポーツ心理学の領域で質的研究を専門としている研究者から研究指導を受けた。

第4章 結果

本研究ではM-GTAを用いて、4名分のデータを分析した。その結果、20の概念、8つのカテゴリー、3つのコア・カテゴリーが生成された(表3)。そして、それらの関係性を「イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手の心理的過程」と題し、概念図として可視化した(図1)。以下では、生成された概念およびカテゴリーの詳細、概念図のストーリーを述べていく。なお、概念(Concept:以下「Co」と略す)は【】, カテゴリー(Category:以下「Ca」と略す)は《》, コア・カテゴリー(Core Category:以下「Cc」と略す)は[]で示している。また具体例は『』で表しており、()内は、対象者を表している。なお、具体例は個人が特定されないように一部加工しているものを記す。

第1節 できていたことができなくなる現実に直面している状態

【Co.2 動作に対する感覚が劣る】、【Co.3 パフォーマンスが著しく低下する】、【Co.1 自身の状態を受容できない】、【Co.4 競技への自信を失う】、【Co.5 プレーに対して回避的な思考になる】、【Co.13 他者の目を必要以上に気にする】、【Co.14 競技継続に不安を覚える】の7個の概念からは、イップスの具体的な症状や、それに伴う心理状態を語っていたため、[Cc.1 できていたことができなくなる現実に直面している状態]と解釈した。以下では、得られた概念の詳細の結果を示している。

【Co.2 動作に対する感覚が劣る】、【Co.3 パフォーマンスが著しく低下する】を集約して《Ca.1 イップス状態に陥ったことを自覚する》とした。これらはイップスの症状を有し、自身の動作や感覚にネガティブな変化があったことを意味する。そこでは、『リリース

の瞬間にどこで離れたらいいかわからなくなるっていうか、力が入っちゃって』(C)のように、動作を遂行する際の感覚が欠落していたことや、『もう変な引っかかりかたして、ボールが変な回転して変なところにいってしまって』(B)のように、これまで経験したことのないようなパフォーマンスの低下に陥っていたと語っていた。

【Co. 1 自身の状態を受容できない】、【Co. 4 競技への自信を失う】を集約して《Ca. 2 今の状態に混乱する》とした。これらは、これまでできていたことができなくなることに對して、恐怖や不安を感じていたことを意味する。そこでは、『キャッチボール投げらなくなったくらいからは、野球の基本じゃないですか、キャッチボールって。それすらできないのかっていう感じでしたね』(D)のように、イップス状態に陥った自分を受け止めることができていなかったことや、『自信はめちゃくちゃなかったっす。(中略)。とりあえず不安で自信なくて』(B)のように、競技に対して不安を感じていたと語っていた。

【Co. 5 プレーに対して回避的な思考になる】、【Co. 13 他者の目を必要以上に気にする】、【Co. 14 競技継続に不安を覚える】を集約して《Ca. 3 現実から目を背けたくなる》とした。これらは、競技に対して、自分から敬遠していたことを意味する。そこでは『めちゃくちゃ怖かったっす、投げること自体が。キャッチボールのときからめちゃくちゃ怖かった』(B)のように、競技におけるプレーに対しての逃避願望が高まっていたことや、『失敗したらダメやみたいな。ここで失敗したら負けるとか、雰囲気悪くなる、監督に怒られる、先輩に怒られるとか、そっちのことばかり考えちゃって、だめだったってなることが多かったですね』(B)のように、周囲からの評価を必要以上に気にしていたと語っていた。

また、『めちゃくちゃ辞めたかったっす、野球、めちゃくちゃ辞めたくて、一生やりたくないって思ったんすよ』(A)のように、競技からの離脱願望を抱いていたと語っていた。

第2節 イップスを克服しようともがいている状態

【Co. 20 他者からの理解を得る】、【Co. 10 競技を引退した自分に価値を見出せない】

【Co. 19 競技を諦められない】、【Co. 9 他者からの心無いことばに苦しむ】、【Co. 12 誰にも相談できない】、【Co. 11 独りで抱えこんでしまう】、【Co. 16 試行錯誤する】、【Co. 15 焦燥感に駆られる】、【Co. 17 努力が実を結ばない】の9個の概念からは、[Cc. 1 できていたことができなくなる現実に直面している状態]でありながらも、イップスを克服しようという試みや、イップスを克服しようと試行錯誤しているプロセスにおける葛藤や困難を語っていたため、[Cc. 2 イップスを克服しようともがいている状態]と解釈した。以下では、得られた概念の詳細の結果を示している。

【Co. 20 他者からの理解を得る】、【Co. 10 競技を引退した自分に価値を見出せない】、

【Co. 19 競技を諦められない】を集約して《Ca. 2 克服しようという気持ちが現れる》と

した。これらは、イップスを克服して、競技を継続する意思が芽生えてきたことを意味する。そこでは『イップスだからそういう差別、言い方悪いですけど、そういうことはなく。

励ましあいて感じですかね。(中略)。そういうみんなには、結構助けられたというか、

楽になった部分もありますね』(C)のように、指導者やチームメイトから自分がイップス

であることを受け入れられたと実感したことや、『野球できない、投げれない自分には価値が

ないのかなーって考えちゃって』(A)のように、競技から離れることに恐怖を覚えていたと語っていた。また、『野球やる以上は、やることやらないとなって感じで、まあある程度考えてはいたんですけど、野球もしっかりとやらないといけないって感じで』(C)のように、競技の継続意思を語っていた。

【Co. 9 他者からの心無いことばに苦しむ】、【Co. 12 誰にも相談できない】、【Co. 11 独りで抱えこんでしまう】を集約して《Ca. 5 自分の居場所を失う》とした。これは、競技における対人関係の中で、孤立していたことを意味する。そこでは『球遅くなったとか、もうめちゃくちゃいやだったりとか、結構重く受け止めちゃう性格というか、すごい嫌で、もう嫌なのかたまってすごいストレスたまっちゃって、それがどンドンふさぎこんじゃって』(A)のように、周囲から自分が投げられない現実を突きつけられたことや、『真剣に聞いてくれないーって思っちゃったりとか。なんか考えちゃって、自分のことを。ちゃんと真剣に聞いてくれんのかなーとか』(A)のように、自身の悩みや苦しみを相談できなかったと語っていた。また、『大学では聞く人もいないんで、自分で、病んでいたは言いすぎですけど、めちゃくちゃ落ち込んでいた時期はあります。練習に行かなくなって』(B)のように、イップスを克服しようと試行錯誤する過程の中で生じる悩みや苦しみを、独りで抱え込んでいたと語っていた。

【Co. 16 試行錯誤する】、【Co. 15 焦燥感に駆られる】、【Co. 17 努力が実を結ばない】を集約して《Ca. 6 思うように報われない》とした。これらは、イップスを克服しようと試行錯誤するものの、思うように改善されていない状態を表している。そこでは、『自分、感覚取り戻すのに、違うボールから試してみるとか、(中略)、自分で一回試してみたのが、

ピンポン玉だとか、ちょっと大きめのボールを使って投げてみたりとか、そういうふうにやってはしてましたね』(C)のように、イップスを克服するために試行錯誤していたことや、『とにかくイップスを治すことだけしか考えていなかったんで、球速も落としてしまったので、その、まずはイップスを治してからじゃないと球速も元に戻せるものも戻せないと思っていなので、(中略)、とにかくイップスを治すっていうことだけでしたね』(C)のように、イップスを克服することへの焦りや逸りを抱いていたと語っていた。また、『何回か横にしてみたいとか、逆に戻してみたいとかしていたんですけど、気づいたら本当に分かんなくなっちゃって、投げ方が』(A)のように、イップスを克服しようと試行錯誤するものの、思うように克服できなかつたと語っていた。

第3節 克服できないと確信している状態

【Co.6 競技することへの価値が低下する】、【Co.7 選手として必要とされていないと感じる】、【Co.8 競技継続に困難を感じる】、【Co.18 競技離脱を選択する】の4個の概念からは、[Cc.2 元にもどろうともがいている状態]を何度も体験するものの、選手としての価値を見失い、競技離脱を選択する語りから、[Cc.3 克服できないと確信している状態]と解釈した。以下では、得られた概念の詳細の結果を示している。

【Co.6 競技することへの価値が低下する】、【Co.7 選手として必要とされていないと感じる】を集約して《Ca.7 競技への熱が冷める》とした。これらは、イップスを克服しようと試みるも《Ca.6 思うように報われない》経験を繰り返すことで、精神的に疲弊して

いたことを意味する。そこでは『なんかもう、やっている意味あるのかなって思い始めて。だって別にこっから頑張って、その社会人に行けるわけでもないし、プロに行けるわけでもないし、意味あるのかなって』(B)のように、競技を継続することに価値を見出せていなかったことや、『自分全く話かけられなくて、いいんだなーって。野球できない、投げられない自分には価値がないのかなーって考えちゃって』(A)のように、周囲から見捨てられたと感じていたと語っていた。

【Co. 8 競技継続に限界を感じる】、【Co. 18 競技離脱を選択する】を集約して《Ca. 17 競技の継続を諦める》とした。これは、競技から離脱する決意をしたことを意味している。そこでは『送球、目の前のキャッチボールができなくなって、それで野球続けるくらいなら違う道があるのではないかと思って』(C)のように、競技から離脱することを検討していたことや、『結局、もう、もういいやってなって、辞めたっす』(B)のように、競技の継続を諦めたと語っていた。

第4節 ストーリーライン

以下では、イップスを経験してから競技離脱を選択するまでのストーリーラインを述べる。

イップス状態に陥ったスポーツ選手は、【Co. 2 動作に対する感覚が劣る】ことや【Co. 3 パフォーマンスが著しく低下する】というような具体的な症状を有することを機に《Ca. 1 イップス状態に陥ったことを自覚する》。それによって【Co. 4 競技への自信を失う】と

ともに【Co.1 自身の状態を受容できない】という事態に陥り，《Ca.2 今の状態に混乱する》ようになる。そのような状態から，【Co.5 プレーに対して回避的な思考になる】とともに【Co.13 他者への目を必要以上に気にする】ようになる。それらによって【Co.14 競技継続に不安を覚える】ようになり《Ca.3 現実から目を背けたくなる》。

それでも【Co.20 他者からの理解を得る】といった理由と，【Co.10 競技を引退した自分に価値を見出せない】といった理由から【Co.19 競技を諦められない】というような《Ca.4 克服しようという気持ちが現れる》。そして，イップスを克服しようと【Co.16 試行錯誤する】ものの，【Co.9 他者からの心無い言葉に苦しむ】ことで【Co.12 誰にも相談できない】ようになる。そして，イップスを克服する過程で生じた葛藤や悩みを【Co.11 独りで抱えこんでしまう】という事態に陥り《Ca.5 自分の居場所を喪失する》。また，イップスを克服したいという焦りや逸りといった【Co.15 焦燥感に駆られる】中で，イップスを克服しようと【Co.16 試行錯誤する】ものの，その【Co.17 努力が実を結ばない】というように《Ca.6 思うように報われない》。しかし，そのような状況下においても，【Co.10 競技を引退した自分に価値を見いだせない】ことから【Co.18 競技を諦められない】。そして再び，イップスを克服しようと【Co.16 試行錯誤する】が，その【Co.17 努力が実を結ばない】をいった《Ca.6 思うように報われない》過程を何度も繰り返す。

そして《Ca.5 自分の居場所を喪失する》と《Ca.6 思うように報われない》過程を何度も経験することで，【Co.7 選手として必要とされてないと感じる】，【Co.6 競技することへの価値が低下する】ようになり《Ca.7 競技への熱が冷める》。そして【Co.8 競技継続

に限界を感じる】ことで【Co. 18 競技離脱を選択する】ようになり, 《Ca. 8 競技の継続を諦める》といった構造を読み取ることができた.

第5章 考察

第1節 パフォーマンスの低下による否定的な心理的变化

本研究において、【Co.2 動作に対する感覚が劣る】、【Co.3 パフォーマンスが著しく低下する】のような《Ca.1 イップス状態に陥ったことを自覚する》ことで、【Co.4 競技への自信を失う】、【Co.13 他者の目を必要以上に気にする】、【Co.14 競技継続に不安を覚える】といった状態に陥る可能性が明らかになった。

先行研究では、イップスを経験したスポーツ選手は、再びイップスが繰り返されるのではないかという予期不安、他者からの評価に対してネガティブな思考、競技への自信の喪失、競技からの逃避願望を抱いていたことが報告されている(Bawden and Maynard, 2001; Philippen and Lobinger, 2012)。また、イップスを克服し、競技継続意思のあるスポーツ選手においても、イップス状態に陥ることで、競技への不安や競技からの離脱願望が高まっていたことが報告されている(松田ほか, 2018)。本研究においても『キャッチボール投げらなくなったくらいからは、野球の基本じゃないですか、キャッチボールって。それすらできないのかっていう感じでしたね』(D)や『めちゃくちゃ辞めたかったっす、野球。めちゃくちゃ辞めたくて、一生やりたくないって思ったんすよ』(A)と語っていた。

これらを踏まえると、イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手は、これまでに経験したことのないような身体感覚の欠如やパフォーマンスの低下によって、競技への不安や自信の喪失といった否定的な心理的变化を経験していた可能性が考えられる。また、これらの心理的变化は、イップスを克服できるか否かに関わらず経験するものであるともいえよう。

第2節 なぜ競技離脱を選択するのか

前節では、イップスを克服できず競技離脱を選択したスポーツ選手は、著しいパフォーマンスの低下によって否定的な心理的变化を経験していたことが明らかになった。そして、それはイップス状態に陥ったスポーツ選手が必然的に経験するものと考えられる。

それではなぜ、競技離脱を選択したのか。本研究の結果から、イップスを克服できず競技離脱を選択したスポーツ選手は【Co. 6 競技することへの価値が低下する】、【Co. 7 選手として必要とされていないと感じる】といった《Ca. 7 競技への熱が冷める》状態を経たのち【Co. 18 競技離脱を選択する】ことが明らかになった。そしてこれらは、スポーツ選手におけるバーンアウトの中核的な状態に類似する。

つまり、イップスを克服できなかったスポーツ選手は、バーンアウトのプロセス（中込・岸，1991）に酷似した過程を経て、競技離脱を選択したことが考えられる。以下では、その理由を考察する。

第1項 周囲との相互性の希薄

本研究では【Co. 12 誰にも相談できない】、【Co. 11 独りで抱え込んでしまう】ことで、【Co. 6 競技することへの価値が低下する】、【Co. 7 選手として必要とされていないと感じる】といった《Ca. 7 競技への熱が冷める》状態に陥る可能性が明らかになった。

岸ほか（1988）は、バーンアウトの症状を有するスポーツ選手の特徴として「私は、他の部員と親密な交際ができなくなっている」、「周りの人たちは私を快く思っていない」といった周囲とのコミュニケーションの低下を挙げている。また、雨宮ほか（2013）は、「私

は、チームメイトとの関係に面倒に思うことがある」、「私は、部活動内での人間関係に無関心になっている」といったバーンアウトの特徴を挙げている。また中込・岸（1991）はバーンアウトの基準を満たしたスポーツ選手は、対処過程において自身の不安や悩みを打ち明けるといった行動の深まりが感じられないと述べている。本研究においても、『真剣に聞いてくれないーって思っちゃったりとか。なんか考えちゃって、自分のことを。ちゃんと真剣に聞いてくれんのかなーとか』（A）や『大学は聞く人もいないんで、自分で、病んでいた方がいいですけど、めちゃくちゃ落ち込んでいた時期はあります。練習に行かなくなっ』（B）と語っていた。その背景には【Co. 9 他者からの心無い言葉に苦しむ】とあった、ソーシャルサポートの不足が関与していることが考えられる。

野栗ほか（2021）は、野球選手がイップス状態に陥っているチームメイトに対して、どのようなソーシャルサポートを行うのかを明らかにするため、大学野球部員 42 名に対して質問紙調査を実施している。その結果、相手への受容的態度や容認的態度を示すといった情緒的なサポート、動作の指導や練習メニューの提案といった技術的なサポートなどを提供していること明らかにしており、向（2016）は、それらがイップスを克服する過程において肯定的な影響を及ぼしていることを明らかにしている。さらに、イップスに限らず、怪我や挫折といった困難事象を乗り越える際にも、周囲からのサポートは重要であるとされている（堀内・能智，2019；和ほか，2011；中島ほか，2023）。しかし、本研究においては、周囲からの理解を一時的に認識したことで、イップスを克服するため試行錯誤するものの、その過程において、周囲からの献身的なサポートを認識することはできなかったことが明らかになった。このことに加え、『球遅くなったなとか、もうめちゃくちゃ嫌だっ

たりとか、(中略)、もう嫌なのがたまっすぎてストレスたまっちゃって、それがどんどんふさぎこんじゃって』(A) というような、周囲から誹られることで、さらなるストレスが蓄積していたと語っていた。土屋(2012)は、競技ストレスが高く、かつ周囲からのソーシャルサポートを十分に受領できていないスポーツ選手は、バーンアウトに陥っている疑いがあることを示唆しているように、本研究の対象者も同様の経験をしていたと考えられる。

これらを踏まえると、イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手は、イップスを克服しようと試行錯誤するプロセスにおいて、周囲からの献身的なサポートを十分に受領することができず、自身に生じる心理的葛藤や悩みを他者に相談することを拒み、対人関係での強い孤立感を覚えていたと考えられる。また、イップスを克服できないという危機的状況においても、同様に、他者との相互性は希薄であることからストレスが蓄積し、最終的には【Co.6 競技することへの価値が低下する】や【Co.7 選手として必要とされていないと感じる】といった《Ca.7 競技への熱が冷める》状態に陥り、競技離脱を選択することに至った可能性が考えられる。

第2項 報われない経験の繰り返し

本研究では、イップスを克服しようと【Co.16 試行錯誤する】ものの、その【Co.17 努力が実を結ばない】経験を繰り返すことで、【Co.6 競技することへの価値が低下する】、【Co.7 選手として必要とされていないと感じる】といった《Ca.7 競技への熱が冷める》といった状態に陥る可能性が明らかになった。

中込・岸（1991）は、バーンアウトに至るプロセスについて、より高い目標を達成するために競技に専心するものの、その努力が思うように報われることがなく、精神的および肉体的な消耗状態になると述べている。また中込（2021）は、バーンアウトの症状を有したサッカー選手の事例において、今よりも高いスキルの獲得のためにトレーニングを継続するものの、その成果を認めることができないことで心身が疲弊していると明らかにしている。本研究においても、『自分、感覚取り戻すのに、違うボールから試してみるとか、（中略）、ちょっと大きめのボールを使って投げを試みたりとか、そういうふうにはやってみましたね』（C）や『何回か横にしてみたいとか、逆に戻してみたいとかしていたんですけど、気づいたら本当に分かんなくなっちゃって、投げ方が』（A）のように、イップスを克服しようと試行錯誤したものの、『Ca. 6 思うように報われない』というような経験をしていたと語っていた。そして、彼らはそれらの経験を、幾度となく繰り返しており、その背景には【Co. 10 競技を引退した自分に価値を見出せない】といった、競技を失うことに対する強い不安が関与していたと考えられる。

Schmidt and Stein(1991)は、スポーツ選手におけるバーンアウト特有の心理過程を説明するモデルとして **Investment model** を提唱している。これは、スポーツ選手が、競技における結果や目標の達成といった報酬（**Reward**）と満足感（**Satisfaction**）が減少することで、心身への負担（**Cost**）が増加するものの、他の選択肢（**Alternative**）がなく競技に固執することから、再び時間を費やす（**Investment**）ことで、心身の消耗といった状態に陥るといったモデルである。本研究においても、イップスを克服しようと試行錯誤するものの、『めっちゃ練習するとか、めっちゃ体動かして対処しようとしたんですけど、また

乗ってこないから、ストレスたまってみたいな』(A) というように、競技への満足度が低下し、心身の負担が増加するが、『でも野球辞めたら何が残るのかなって』(A) や『今まで野球しかしてこなくて、勉強も全くしてないし、(中略)、自分から野球とったら何が残るのかなっていう風に、不安がありましたね』(C) というように、自身の価値を競技にしか見出すことができず、競技から一定の距離を置くことに困難を覚え、再びイップスを克服するための試行錯誤に多くの時間を費やす。そして、結果的に《Ca. 6 思うように報われない》という経験を繰り返していたことが明らかになった。

これらを踏まえると、イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手は、自分自身の状態から抜け出そうと試行錯誤するが報われないことで、競技への専心性および満足度が低下するものの、自己のアイデンティティである競技に固執するために、多くの時間を費やしてしまう。そして、報われないという経験を幾度となく繰り返した結果、【Co. 6 競技することへの価値が低下する】や【Co.7 選手として必要とされていないと感じる】といった《Ca. 7 競技への熱が冷める》状態に陥り、競技離脱を選択することに至った可能性が考えられる。

第6章 総括および本研究の限界

第1節 総括

本研究は、イップスを克服できなかったスポーツ選手が、競技離脱を選択するまでの心理的過程を明らかにすることを目的とし、質的研究法を用いて検討した。

その結果、「イップス状態に陥ったスポーツ選手は、著しいパフォーマンスの低下によって、自信の喪失や競技からの逃避傾向といった否定的な心理的变化を経験しながらも、イップス状態から抜け出そうと試行錯誤する。しかし、他者からの献身的なサポートはなく、心身の負担や葛藤を独りで抱え込むようになる。さらに、イップスを克服できないものの、自身の価値を競技にしか見いだせず、幾度となく試行錯誤を繰り返すが報われない。そして最終的に、情緒的な消耗状態に陥り、競技離脱を選択する可能性がある」といった仮説的知見を導き出すに至った。

本研究の結果から、イップス状態に陥ったスポーツ選手は(1) 周囲との相互性の希薄、(2) 競技の固執を背景にした報われない経験の繰り返し、といったバーンアウトのプロセスに酷似した過程を経て、競技離脱を選択する可能性が考えられる。このような結果は、イップス状態に陥ったスポーツ選手の心理的背景や、それに基づく心理状態を理解するうえで重要な知見になりうるだろう。また、本研究の結果はイップス状態に陥ったスポーツ選手に対する心理的支援の構築に貢献できる知見と考えられる。

第2節 本研究の限界

まず、本研究は野球競技を対象にして研究を進めた。しかし、野球以外にもさまざまな競技でイップスの症例が報告されており (Clarke et al., 2015)、さらに、男性に限らず女性のスポーツ選手においても、この現象が見られていることが報告されている (稲田・田中, 2019)。さらに本研究では、イップスを克服できずに競技離脱したスポーツ選手のみを対象にしているが、イップスを克服することができたスポーツ選手も調査対象者に加えることで、より発展的な知見を得ることができよう。これらを踏まえたうえで、今後は、他競技へのアプローチ、ならびイップスを克服できたスポーツ選手との比較を行い、さらなる知見を深めていくことが求められる。

次に、本研究では、イップスを克服できなかったスポーツ選手は、バーンアウトのプロセスと酷似した過程を経て、競技離脱を選択する可能性が明らかになった。しかし、「診断をより確かなものとするには、問題が発症するまでのプロセスに関わる情報を加えなければならぬ」という中込 (2021) の指摘を踏まえると、本研究の結果は、バーンアウトに至るすべての特徴を捉えきれたわけではない。特に、競技への熱中状態に関しては、『(イップスになる前は) それこそめちゃくちゃ上手くなりたかったし、上のレベルでやりたかったすよ、大学とかでも野球で行きたかったっすよ。大学行って将来的にもプロになりたかって思ったときもあったし、(中略)、目標高く設定して、やっていました』(A) のような語りがあったものの、概念の生成には至らなかった。これは本研究の関心が、イップス状態に陥ってからどのような心理的過程を経ていたのかという点にあり、インタビューガイドを作成する段階で、イップス状態に陥る以前のプロセスは考慮していなかったこと、

さらにその部分に関する語りが乏しかったため、である。これらを踏まえると、本研究の成果は、より慎重な解釈が必要であり、今後もさらなる検討が必要である。

最後に、本研究における著者の枠組みを見てもわかるように（第3章を参照）、10年以上の競技歴と自分自身の競技および指導経験から、分析の段階でバイアスがかかっていた可能性は否めない。無論、著者の競技理念や競技経験における恣意的な解釈を防ぐため、運動部活動に所属していたものの野球競技に携わった経験がない大学院生、運動部活動の所属歴がない研究助手の3名で慎重にデータの解釈を行った。また、スポーツメンタルトレーニング指導士および公認心理師の資格を有する大学教授、質的研究を専門とする研究者から指導を受け、客観的解釈に努めた。しかし、著者のスポーツにおけるイップスへの強い思いが、何らかの形で影響していた可能性がないとは言い難い。

以上の点を踏まえたうえで、本研究の成果をスポーツの指導現場および臨床現場にフィードバックする必要がある。特に、先行研究とは異なり、イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手を対象にすることで、新たな仮説的知見を導き出すに至った。今後は、臨床事例の積み重ねや多角的視点からの研究を行うことで、本研究の成果をより精緻化し、イップス状態に陥ったスポーツ選手に対する、心理的支援の構築を確立するための議論が、発展継承的に行われることを期待したい。

参考文献

- 1) Adler, C. H., Crews, D., Kahol, K., Santello, M., Noble, B., Hentz, J. G., and Caviness, J. N. (2011) Are the yips a task - specific dystonia or “golfer's cramp”? *Movement Disorders*, 26(11) : 1993-1996.
- 2) Adler, C. H., Temkit, M., Crews, D., McDaniel, T., Tucker, J., Hentz, J. G., Marquardt, C., Abraham, D., and Caviness, J. N. (2018) The yips: Methods to identify golfers with a dystonic etiology/golfer's cramp. *Medicine and Science in Sports and Exercise*, 50(11) : 2226-2230.
- 3) 秋葉茂季 (2021) 長期活動休止時や再開時の心理面での課題や対策. *日本アスレティックトレーニング学会誌*, 6(2) : 153-159.
- 4) 雨宮怜・上野雄己・清水安夫 (2013) 大学生スポーツ競技者のアスレティック・バーンアウトに関する研究—大学生スポーツ競技者版バーンアウト尺度の開発及び基本的属性を用いた検討—. *スポーツ精神医学*, 10 : 51-61.
- 5) 青山敏之・阿江数通・相馬寛人・宮田一弘・梶田和宏・奈良隆章・川村 卓 (2021) 大学選手における送球イップスの発症率とその症状に関する探索的研究. *体力科学*, 70(1) : 91-100.
- 6) Bawden, M., and Maynard, I. (2001) Towards an understanding of the personal experience of the 'yips' in cricketers. *Journal of Sports Sciences*, 19(12) : 937-953.
- 7) Bell, R. J., Skinner, C. H., and Fisher, L. A. (2009) Decreasing putting yips in accomplished golfers via solution-focused guided imagery : A single-subject

- research design. *Journal of Applied Sport Psychology*, 21(1) : 1-14.
- 8) Bell, R. J., Skinner, C. H., and Halbrook, M. K. (2011) Solution focused guided imagery as an intervention for golfers with the yips. *Journal of Imagery Research in Sports and Physical Activity*, 6(1) : 1-16.
 - 9) Bell, R. J., and Thompson, C. L. (2007) Solution-focused guided imagery for a golfer experiencing the yips : a case study. *Athletic Insight*, 9(1) : 52-66.
 - 10) Bennett, J., Rotherham, M., Hays, K., Olusoga, P., and Maynard, I. (2016) Yips and lost move syndrome : Assessing impact and exploring levels of perfectionism, rumination, and reinvestment. *Sport and exercise psychology review*, 12(1) : 14-27.
 - 11) Clarke, P., Sheffield, D., and Akehurst, S. (2015) The yips in sport : A systematic review. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 8(1) : 156-184.
 - 12) Clarke, P., Sheffield, D., and Akehurst, S. (2020) Personality predictors of yips and choking susceptibility. *Frontiers in Psychology*, 10 : 2784.
 - 13) Cooke, A., Kavussanu, M., McIntyre, D., and Ring, C. (2010) Psychological, muscular and kinematic factors mediate performance under pressure. *Psychophysiology*, 47(6) : 1109-1118.
 - 14) Dhungana, S. and Jankovic, J. (2013) Yips and other movement disorders in golfers. *Movement Disorders*, 28(5) : 576-581.
 - 15) 福井邦宗・豊田則成 (2015) ゴールキーパーが失敗を克服する心理的プロセスの検討—サッカーのゴールキーパーは失点をどのように乗り越えるのか—. *スポーツ心理学研*

究, 42(2) : 67-79.

- 16) 堀内多恵,・能智正博 (2019) 受傷アスリート男性の競技離脱経験をめぐり—本人の認識する復帰に焦点を当てて. 質的心理学研究, 19(1) : 83-102.
- 17) 飯島智則 (2018) イップスは治る! 洋泉社 : 東京.
- 18) 今福輪太郎 (2021) 質的研究を実施するうえで知っておきたい基本理念. 薬学教育, 5 : 1-6.
- 19) 稲田愛子・田中美吏 (2019) ソフトボールのイップス—選手の主観に関する実情調査—健康運動科学, 9(1) : 1-11.
- 20) 石原 心・内田 直 (2017) イップス—選手を悩ます謎の症状に挑む—. 大修館書店 : 東京.
- 21) 伊豫雅臣 (2023) 認知行動療法的アプローチによるパターイップスが改善したプロゴルファーの一例. スポーツ精神医学, 20 : 55-57.
- 22) 賀川昌明・深江守 (2013) 投・送球障がい兆候を示す中学校野球部員の心理的特性. 鳴門教育大学研究紀要, 28 : 440-453.
- 23) 和秀俊,・遠藤伸太郎・大石和男 (2011) スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程—男性中高生競技者の質的研究の観点から—. 体育学研究, 56(1) : 89-103.
- 24) 柄木田健太・田中美吏・稲田愛子 (2022) スポーツにおけるイップスのアセスメント・症状・対処. スポーツ心理学研究, 49(1) : 5-19.
- 25) 川島大輔 (2007) ライフレビュー. やまだようこ編, 質的心理学の方法—語りをきく—, 新曜社 : 東京, pp.144-158.

- 26) 木村直登・木村武登・金子元彦 (2022) 大学生卓球競技者におけるイップス症状の起因別タイプ分け. ライフデザイン学研究, 17 : 83-97.
- 27) 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—. 弘文堂 : 東京.
- 28) 木下康仁 (2020) 定本 M-GTA —実践の理論化をめざす質的研究方法論—. 医学書院 : 東京.
- 29) 岸 順治・中込四郎・高見和至 (1988) 運動選手のバーンアウト尺度作成の試み. スポーツ心理学研究, 15 : 54-59.
- 30) 栗林千聡・武部匡也・松原耕平・高橋 史・佐藤 寛 (2019) イップスの操作的定義と介入法の提案に向けたシステマティックレビュー—多領域の連携可能性—. スポーツ精神医学, 16 : 31-41.
- 31) 松田晃二郎・須崎康臣・向 晃佑・杉山佳生 (2018) イップスを経験した選手の心理的成長—野球選手を対象として—. スポーツ心理学研究, 45 : 73-87.
- 32) 目崎高広 (2011) ジストニアの病態と治療. 臨床神経学, 51(7) : 465-470.
- 33) 向 晃佑 (2016) 複線径路・等至性モデル (TEM) による送球イップス経験者の心理プロセスの検討. 質的心理学研究, 15 : 159-170.
- 34) 中込四郎・岸順治 (1991) 運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究. 体育学研究, 35 : 313-323.
- 35) 中込四郎 (2004) アスリートの心理臨床—スポーツカウンセリナー—. 道和書院 : 東京.

- 36) 中込四郎 (2021) スポーツパフォーマンス心理臨床学—アスリートの身体から心へ—. 岩崎学術：東京.
- 37) 中島明香・浅沼道成・長谷川弓子 (2023) 熟練競技者が競技人生においてどん底に至った際の心理的・行動的特徴：社会人陸上競技経験者を対象とした事例研究. スポーツパフォーマンス研究, 15 : 206-223.
- 38) Nakane, S., Ando, Y., and Matsuo, H. (2018) Yips preceding baseball-related dystonia. *Parkinsonism and Related Disorders*, 50 : 128-129.
- 39) 新村出 (2018) 広辞苑 第七版. 岩波新書：東京, pp189.
- 40) 西尾誠一郎・林祐一・加藤新英・大野陽哉・和座雅浩・長尾洋一郎・向野晃弘・中根俊成・下畑享良 (2021) 弓道における異常な運動 (いわゆるイップス)—頻度, 分類, 危険因子の検討—. *臨床神経学*, 61(8) : 522-529.
- 41) 野栗立成・川田裕次郎・山口慎史・広沢正孝・柴田展人 (2021) 日本人イップス野球選手へのチームメイトによるサポート行動の把握. *応用心理学研究*, 46(3) : 257-263.
- 42) Papineau, D. (2015) Choking and the yips. *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 14(2) : 295-308.
- 43) Philippen, P. B. and Lobinger, B. H. (2012) Understanding the yips in golf : Thoughts, feelings, and focus of attention in yips-affected golfers. *The Sport Psychologist*, 26(3) : 325-340.
- 44) Revankar, G. S., Kajiyama, Y., Gon, Y., Ogasawara, I., Hattori, N., Nakano, T., Kawamura, S., Ugawa, Y., Nakata, K., Mochizuki, H. (2021) Perception

- of yips among professional Japanese golfers: perspectives from a network modelled approach. *Scientific Reports*, 11(1) : 20128.
- 45) Roberts, R., Rotheram, M., Maynard, I., Thomas, O., and Woodman, T. (2013) Perfectionism and the 'Yips' : an initial investigation. *The Sport Psychologist*, 27(1) : 53-61.
- 46) 西條剛央 (2007) ライブ講義 : 質的研究とは何か—SCQRM ベーシック編—. 新曜社 : 東京.
- 47) 坂中尚哉 (2022) 送球イップスを抱えた高校アスリートとの心理面接事例. 香川大学大学院医学系研究科臨床心理学専攻心理臨床相談室紀要, 1 : 35-43.
- 48) Schmidt, G. W., and Stein, G. L. (1991) Sport commitment : A model integrating enjoyment, dropout, and burnout. *Journal of sport and exercise psychology*, 13(3) : 254-265.
- 49) Smith, A. M., Adler, C. H., Crews, D., Wharen, R. E., Laskowski, E. R., Barnes, K., Bell, C. V., Pelz, D., Brennan, R. D., Smith, J., Sorenson, M. C., and Kaufman, K. R. (2003) The 'yips' in golf : A continuum between a focal dystonia and choking. *Sports Medicine*, 33 : 13-31.
- 50) Smith, A. M., Malo, S. A., Laskowski, E. R., Sabick, M., Cooney, W. P. 3rd., Finnie, S. B., Crews, D. J., Eischen, J. J., Hay, I. D., Detling, N. J., and Kaufman K. (2000) A multidisciplinary study of the 'yips' phenomenon in golf : An exploratory analysis. *Sports Medicine*, 30 : 423-437.

- 51) Stinear, C. M., Coxon, J. P., Fleming, M. K., Lim, V. K., Prepapavessis, H., and Byblow, W. D. (2006) The yips in golf : Multimodal evidence for two subtypes. *Medicine and Science in Sport and Exercise*, 38 : 1980-1989.
- 52) スポニチ Sponichi Annex (2023) 自動車教習所→ロツテ 6 位→イップスで引退.
<https://www.sponichi.co.jp/baseball/news/2023/02/18/kiji/20230218s00001173501000c.html> (参照日 2024 年 1 月 10 日).
- 53) 鈴木裕久 (2016) 臨床心理研究のための質的方法概説. 創風社 : 東京.
- 54) 高木廣文 (2011) 質的研究を科学する. 医学書院 : 東京.
- 55) 寺下貴美 (2011) 教育講座—研究方法論—第 7 回 質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～. *日本放射線技術学会雑誌*, 67(4) : 413-417.
- 56) 富永哲志・土屋裕睦・豊田則成 (2020) アディショナルタイムにスコアが動く時の選手の動機づけ状態に関する質的研究: リバーサル理論を枠組みとして. *体育学研究*, 65: 723-740.
- 57) 富永哲志・豊田則成・福井邦宗 (2015) 「できない」ことが「できる」ようになる過程についての質的研究. *スポーツ心理学研究*, 42(2) : 51-65.
- 58) 土屋裕睦 (2012) ソーシャルサポートを活用したスポーツカウンセリング. 風間書房 : 東京.
- 59) 土屋裕睦 (2018) わが国のスポーツ心理学の現状と課題. *心身医学*, 58(2) : 159-165.
- 60) ウヴェ・フリック (2017) 質的研究入門—<人間の科学> のための方法論. 春秋社 : 東京.

- 61) Watanabe, T., Yoshioka, K., Matsushita, K., and Ishihara, S. (2021). Modulation of sensorimotor cortical oscillations in athletes with yips. *Scientific Reports*, 11(1): 10376.

図表・資料

表 1 調査対象者のプロフィール

表 2 分析ワークシートの一例

表 3 概念およびカテゴリーの一覧

図 1 イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手の心理的過程

資料 1 同意書

資料 2 アスリート・ライフライン

表1 対象者のプロフィール

調査対象者	年齢	競技歴	ポジション	イップス継続歴	競技引退してからの年数
対象者A	21歳	12年	投手	2年	2年
対象者B	21歳	14年	野手	6か月～1年	1年
対象者C	23歳	11年	投手	1年	1年
対象者D	24歳	13年	野手	2年	3年

表2 分析ワークシートの一例

10	競技を引退した自分に価値を見出せない
定義	競技を辞めることで自分の価値を喪失するのではないかという危機にある
具体例	<p>「正直野球以外やってこなかったんで、勉強とかもできるわけじゃないし、かといって運動とかもできるわけじゃないから、そんなに。野球しかやってこなかったかた、野球なくなったら何残るとかなって、野球できない自分て何の価値があるのかなって」 (A)</p> <p>「野球やめたらなにが残んのかなーって感じで」 (A)</p> <p>「野球できない、投げれない自分には価値がないのかなーって考えちゃって」 (A)」</p> <p>「今まで野球しかしてこなくて、勉強も全くしてないし、その、高校も大学に行けるようなレベルじゃなかったんで、自分から野球とったら何残るのかなっていう風に、不安がありましたね」 (C)</p> <p>「でも辞めたら何が残るのかなって」 (A)</p> <p>「実際、選手を辞めた自分をイメージしたときに、夢がなくなるというか、不安ってというか、それがちょっとやだなーって思って」 (D)</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまで、野球以外のことをなにもやってきてこなかった ➡ 野球を辞めたら自分に何が残るのかという気持ちがある ・ 競技アイデンティティを喪失する危機に直面しているのではないか ・ 「自分から野球をとったら何が残るのか」「辞めたら何が残るのか」 ➡ 野球を辞めた自分の価値を見出せていない ・ 選手を辞めることで、自分の夢が完全に途絶えることへの不安 ➡ プロになることが自分のアイデンティティになっているのではないか ➡ そのアイデンティティを喪失する危機にある ➡ それを喪失したら…

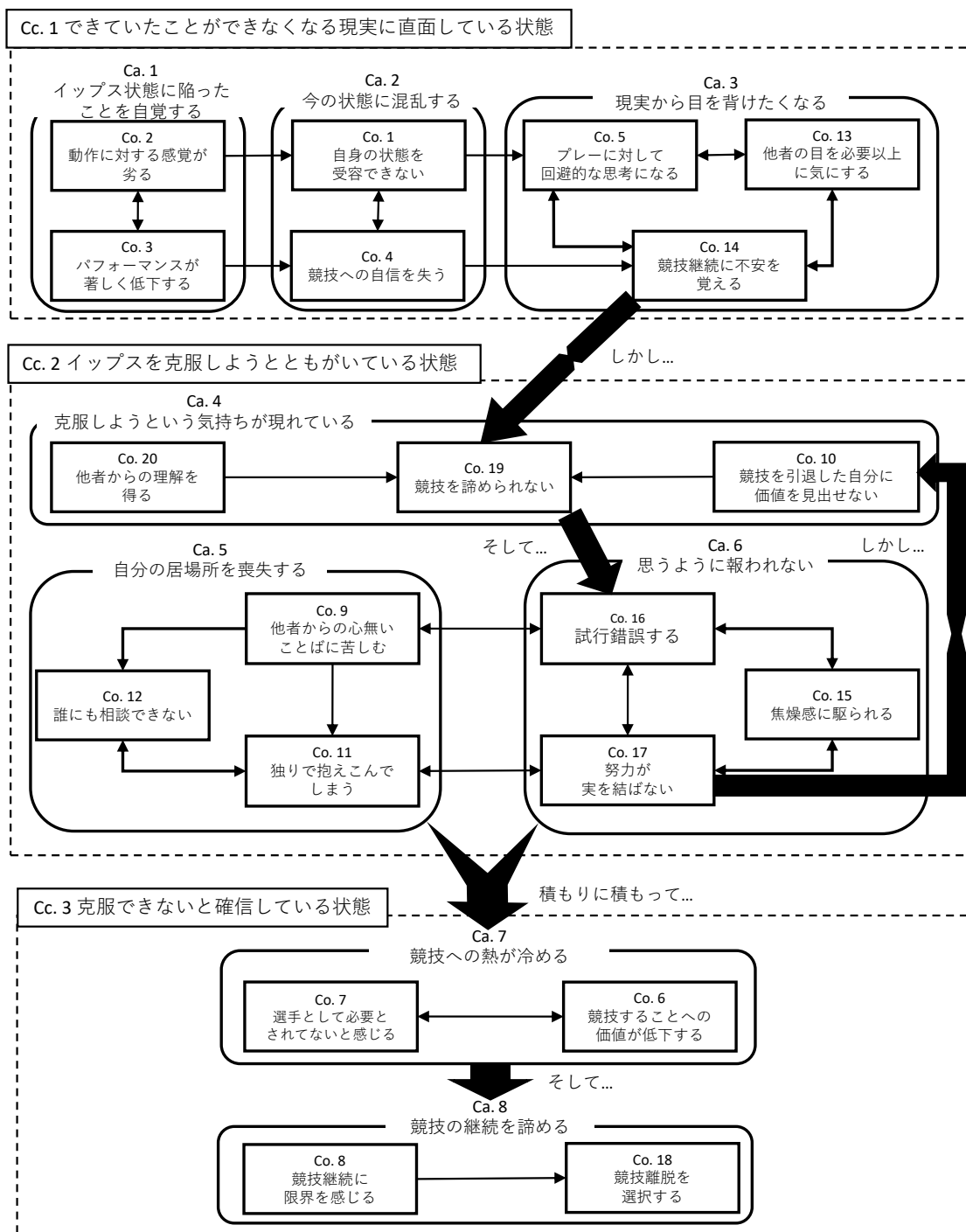


図1 イップスを克服できずに競技離脱を選択したスポーツ選手の心理的過程

同意書

大阪体育大学 学長 様

研究課題名：できていたことができなくなるのをどのように語るのか

-野球イップスを対象とした質的検討-

私は、大阪体育大学における上記の研究に関する以下の項目について、十分な説明を受け、了承いたしましたので、研究協力者になることに同意いたします。

本調査は、「できていた」ことが「できなくなる」イップスという現象を経験したアスリートの内的体験を質的に分析することを目的としております。同時に、今後イップスという現象で苦しむ方への心理的支援構築・発展の一助になることを目的としております。

インタビュー内容は、データ確保のため録音させていただきます。取得したデータは研究代表者が厳重に保管し、外部には一切漏れないよう十分留意します。また研究資料として扱う際は、調査協力者のプライバシー保護のため匿名化し、個人が特定されないように留意いたします。

調査協力者のインタビュー参加の可否は、任意であり強制的なものではありません。インタビュー中、回答したくない質問に対しては拒否することができ、いつでも辞退することができます。いかなる理由で辞退しても、調査協力者のみなさまに不利益が生じることはございません。

なおインタビューに参加してくださった場合、1万円の謝金を支払わせていただきます。

(インタビュー中の辞退については、謝金の半分を支払わせていただきます。)

この調査に関して、ご意見ご質問などがございましたら、下記のアドレスまでご連絡をいただきますようお願いいたします。

大阪体育大学大学院 土屋研究室
博士前期課程 池田和司
222m02@ouhs.ac.jp
ikedakazushi7@icloud.com
090-9202-6997

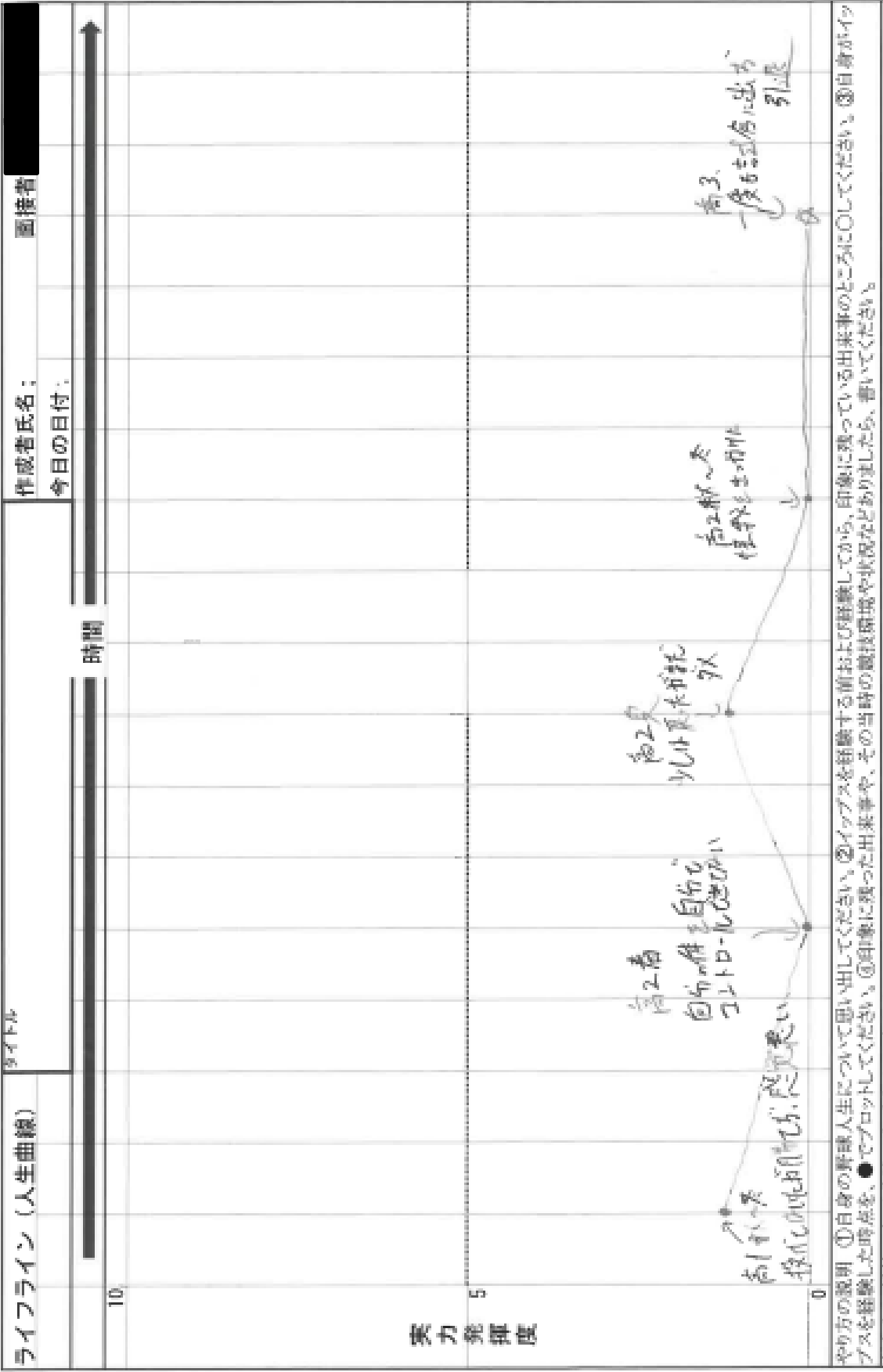
令和 年 月 日

研究協力者署名： _____

電話番号： _____

説明者署名： _____

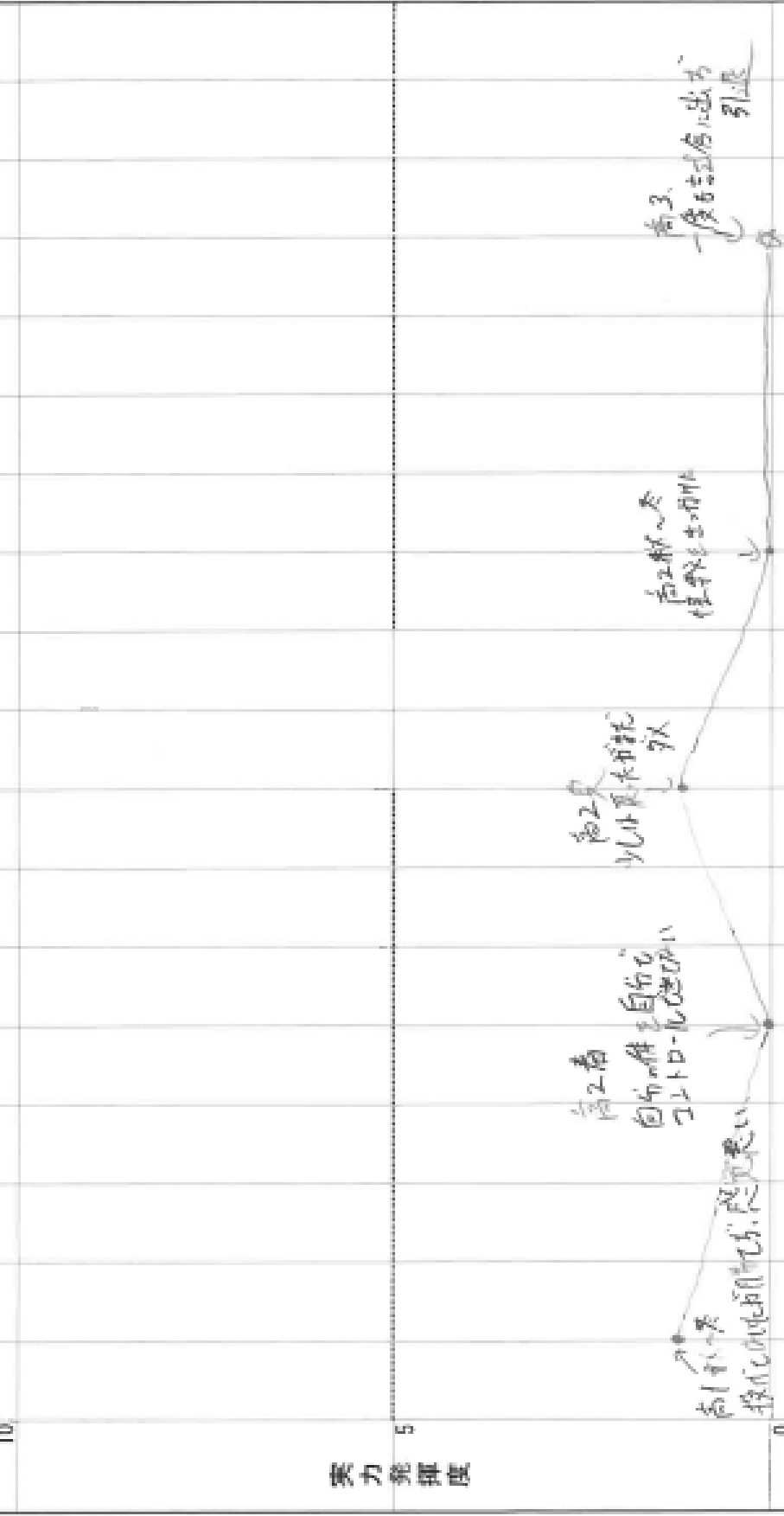
研究代表者署名： _____



タイトル 作成者氏名: XXXXXXXXXX 面接者

ライフライン (人生曲線) 今日の目付:

10 時間



やり方の説明 ①自身の野球人生について思い出ししてください。②イメージを体験する前および体験している出来事のところみに○してください。③自身がイメージを体験した時点を、●でプロットしてください。④印象に残った出来事や、その当時の競技環境や状況などがありましたら、書いてください。

あとがき（謝辞も含む）

2014年8月14日、全国大会準々決勝、当時中学2年生の私はキャッチャーとして出場しており、悲願の全国ベスト4が目前だった。しかしその試合、センターからの返球を落球した私のエラーにより、チームは敗退した。そこからだった。私は野球をするのが怖くなり、キャッチャーのポジションにつくたびに、体が震えた。そして気づいたら、ボールが投げられなくなっていた。それでも、中学野球はそこその成績を残し、私立高校からいくつか声がかかったが、やっていける自信がなく公立高校に進学した。高校では、脚力をかわれ、外野にコンバートするものの、事態は悪化する一方だった。外野から全力で投げたボールは5メートル先で力なく失速し、今にも止まりそうなスピードでホームベースまで転がる。キャッチボールでは、まともに相手の胸に投げた記憶はない。練習においても、内野までまともに返球することができず、指導者やチームメイトから揶揄される日々が続いた。私は、この悲痛な思いを誰かに打ち明けることはできず、どうすればよいのかわからなかった。緊張と不安から、練習の前に学校のトイレに籠ったこともしばしばあった。相手チームの指導者から、「あのレフト投げられねーぞ！狙え！」と野次を飛ばされたこともあった。そしていつしか、指導者に呆れられたのか、怒られることもなくなり、試合への出場機会は減少していった。「おい、左利きのやつからグローブ借りてこい」といわれ、同級生から左用のグラブを借りて、全体練習の最中に、ブルペンで左投げの練習をさせられたのは、野球人生最大の屈辱だった。

「君は何しに大阪へ」。私のパソコンのデスクトップには、そのような文字が大きく書かれている。私が、なぜ大学院に進学したのか、なぜスポーツ心理学を勉強するために大阪体育大学に進学したのか、それははっきりしていた。私はあの時どうすればよかったのか知りたかったからである。それを知るために、大阪体育大学大学院に進学し、研究を始めた。だが時折、本当にこれでいいのか、こんな研究でいいのかと自問自答する日々が続いた。その感情は、何もできずに苦しんでいたあのときと重なるものがあり、恐怖すら覚えた。しかし、私の周りには、優秀な先生方と先輩方、かわいらしい後輩たち、そして我が強く個性的な同期で溢れていた。そして私はそのような多くの方々に救われ、ここまで来ることができた。

まず、指導教員でもある土屋裕睦教授には、感謝と尊敬の念でいっぱいである。土屋先生と最初にお話しさせていただいたのは、大学2回生の3月である。私が、土屋先生がどのような研究をしているのかも知らずに「私はイップスの研究がしたいです！」と言うと、「なら、うちでやってみない？歓迎するよ！」と声をかけてくれたことは鮮明に覚えている。そうして土屋ファミリーの一員になったが、研究は思うように進まず、土屋先生には多大な迷惑をかけた。それでも、私のやりたい研究を真摯に受け止めていただき、数々のアドバイスをいただいた。それらがなければ、この修士論文を書き上げることはできなかったであろう。また私は、土屋先生と体罰研究をさせていただくという、大変貴重な経験もさせていただいた。特に、部活動学会や九州スポーツ心理学会での発表の際には、これまで以上に多くのアドバイスをいただいた。これからも、土屋先生の意志を継いで（恐れ多いが…）、日本スポーツ界の体罰根絶に尽力していきたい。そして、土屋研究室の名に恥じないように、過ごしていきたい。

また、助手の竹中優子先生にも御礼を申し上げたい。心理フロアの母として、いつも私たちを温かく見守ってくれた。修士論文の添削からデータの分析補助、履歴書の書き方まで指導していただき、多くの時間を割いていただいた。時には、ごはんを作っていたいただいた。本当に感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

本研究の副査をして頂いた、平川武仁教授、曾根純也教授にも御礼を申し上げたい。お二方とも、本研究に興味を持ってくださったことは、私にとって何よりも嬉しいことであった。添削していただいた修士論文は、これからの研究活動の糧として、大切に保存し、参考にさせていただきます。心より、感謝申し上げます。

同じく、心理フロアの菅生貴之教授、手塚洋介教授、白井麻子教授、小菅萌准教授にも御礼申し上げたい。特に菅生先生は、心理サポートを行ううえでのスーパーバイザーとして、幾度となくSVを受けさせていただいた。そして、ご自宅にも招いていただき、深夜までたわいもない話から真面目な話まで、多くの勉強をさせていただいた。私は泣き虫だったので、先生の前で何度泣いたことだろう(SVでもしばしば…)。本当にご迷惑をおかけしたと思う。次にお会いするときは、一人の社会人として立派な姿を見せたいと同時に、ゴルフのスコアで勝ちたいと思っている。

また、D1の加藤憲さん、川村亮太さん、M1の有井大芽くん、藤原由規くん、山田龍生くん、浦野奈央さん、杉野瑞稀さん、端岡理紗さん、山口葉さんにも感謝の念を伝えたい。SMTチームの統括として、多くの迷惑をかけてきて、頼りない統括だったが、こんな私についてきてくれてありがとう。特に後輩たちには、自分のペースで(もちろん期限を守ったうえで)、自分のやりたいことを全うしてほしい。これから大変なこともたくさんあると思うけど、無理せず力強く歩んでほしいと思う。

そして、同期の伊藤浩一、大田亜海、澁谷愛佳、三石佑馬、渡邊浩輝、この5人は本当に感謝している。時にはぶつかり、B243で長時間のミーティングをしたこともあった。それでも、時間があればみんなできつけの居酒屋に行き飲みだり、一緒に野球やハンドボールをして汗を流したこともあった。夜中まで研究について話しこんだり、互いの研究の被験者になったり(私は何度、頭に電極をつけられたらどうか…)、思い出は尽きない。そして何より、みんなで新入生サポートのデータを学会発表できたのは嬉しかった。今は私を筆頭に、論文化を進めているが、5人の名に恥じないように精一杯書きたい。「いつか5人でシンポジウムとかできたらいいねー」と冗談で話すこともあったが、それだけはおめでとう。おそらく、一人一人の我が強すぎて、シンポジウムにならないことが予想されるからである(笑)。それくらい、個性的な同期であり、同時に私の誇りである。これからはそれぞれの道を歩むことになるが、年に1回くらいは、一緒にお酒飲みだりして、お互いの進捗などを話したい。これからも、よろしく願いいたします。

他にも、多くの先生方にお世話になった。特に、松田晃二郎先生(熊本学園大学)には、学会でお会いするたびに声をかけていただき、研究の進捗など気にかけていただいた。私がイップスの研究を行おうと思ったのも、松田先生が執筆された論文を拝読させていただいたからである。また私の研究に興味を持っていただいたことは、本当に嬉しかったし、励みになった。心から感謝申し上げたい。

また、忘れてならないのは、インタビューに協力していただいた4人の調査対象者の方には、感謝してもしきれない。本研究は、かなりデリケートな話であったにも関わらず、インタビューを承諾していただき、多くのことを語っていただいた。本当に感謝したい。

最後に、24年間支えてくれた家族に感謝の念を述べたい。10年近く家族のために海外勤務で多忙を極める父、どんなに大変でもいつも笑顔を保ち明るくいる母、自分の将来に向かって努力し続ける妹、私の自慢の家族である。大学受験に失敗し、中京大学に行くことが決まった時、就職せず大学院に行きたいといった時、「和司の好きなようにしなさい」と背中を押してくれたことは、本当に感謝している。これからは、池田家の長男として、恥じないよう頑張りたい。そして、知識が豊富でいつも多くの学びを与えてくれる父方の祖父母と叔父、いつも明るく自分の将来を気にかけてくれる母方の祖父にもたくさん支えられてきた。大変感謝している。

「君は何しに大阪へ」。その目的を果たすには程遠いが、ようやく一歩踏み出すことができたのかもしれない。そしてその一歩は、多くの方々に支えられて踏み出すことができた貴重な一歩である。この一歩を踏み出すまでの苦労や困難、そして感謝を忘れずにこれからも過ごしていくことを誓う。これからパソコンのデスクトップは何にしようか。私はこれからも、「君は何しに〇〇へ」として行く。初心と感謝を忘れないように。

令和6年 2月15日
B324にて